

## ■ 神奈川県大学図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)  
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL (0463)59-4111(代表)  
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

## ヴァカンスについて

村上 順

夏休みは、フランス語では、グランド・ヴァカンス (grandes vacances) というが、vacanceには、辞書によれば“空無”とか“無為”、“放心”といった意味がみとめられる。要するに空っぽ (vacant) ということであろう。そうだとすれば、フランス的には、夏休みは大なる無為ということで、そのように過ごすことがもとめられるのではないか。ヴァカンスの期間が一カ月近くと、長い休みがとれること、日本人のように、この機会にと急いで走り回り疲れるだけの旅行をするのではなく、長期滞在型が選好されるのも故なしとしないように思われる。したがって、「夏休みの過ごし方」といったテーマは、フランス人にとってみれば野暮なお節介で、ほっといてくれということになるのではないだろうか。これに対し、日本の“夏休み”は、暑いから休めるということもあるが、“休み”の語感からはこれまでの疲れをいやし、明日の活力を生むための機能的な時間 (休息) を意味するように思える。夏休みも“一時休止”にとどまる。そうだとしたならば、いつまでも休んではいられなく、疲れがとれたならさっさと職場に復帰しなさいということになる。学生も、そもそも疲れるほど普段勉強していないのだから、夏休みこそ図書館に通って勉強しろということになる。GDP 大国日本がフランスやドイツよりも夏休みが極端に短いのはフにおちないが、休まないから GDP 大国になれたということもあるのだろう。そうだとしたら GDP 指標は何のため、誰のためにあるのかと思わざるをえない。日本人は、おそらくヴァカンスの実感をもてないのではないかとと思われる。

それはさておき、小・中学時代の夏休みは、当初の開放感よりも、ヒグラシが鳴き始める夕暮れ時の、何か胸つぶれるような切迫感の方が今なお



記憶に残る。夏休みがおわろうとしているとき、宿題をすましていないからだけではない名状しがたい感情である。夏というと、今でも学生時代読んだ伊藤静男の詩が思い出される。「水中花」などであるが、9.11事件のせい、今あらためてみるとテロリスト(?)の詩だったのかとも思う。また、敗戦の悲しみを歌ったとされる「夏のおわり」も有名である。もちろん、その頃 (終戦時) は私も生まれていなかったが、さもありませんというような詩的喚起力がある。夏を詠んだものに秀歌があるせいか、日本浪漫派という夕暮れ時を思わせる。晩夏は衰兆を示すものがあるのかもしれない。終戦記念日の8月15日は、夏のイベント (旧盆) のピーク時でもある。天皇の終 (敗) 戦を伝える玉音放送について、当時の作家・文学者らは、その直後しばらくの間、人々が (本人も) おちいった方向感覚の失調と混迷を報じているが、それはおそらく晩夏の出来事だったため、より衝撃的に受けとめたのではないかとと思われる。そのとき、日本人は、確実にヴァカンス (空無) を体験したのではないかとと思われる……………。

さて、本題に戻れば、夏休みは故郷に帰り、日中の暑かったことを思い出しながら、夕暮れ時のヒグラシの声に耳を傾け過ごすのがなによりである。  
(法学部教授・行政法)

# 夏休みとフィールドワーク

岡 崎 彰

夏休みには本をじっくり読むのもいいが、本では得られない体験を試みるのもいい。「一夏の体験」というと思春期の「異性」体験を描いた映画を思い出すかもしれないが、「異文化」のような世界でフィールドワークをするのもそれとちょっと似ている。両者とも、とにかくやってみないとわからない体験。自分の何かが変わってしまうようなスゴイ体験になるかもしれない。「異文化」と言っても何も海外へ行く必要はない。それは意外と身近なところにある。ただしそんな「異文化」はあまり付き合いたくない対象である場合も多い。では「身近な異文化のフィールドワーク」とはいったい何をどのようにすることなのか、私のゼミでの例をあげよう。

実際にホームレスのフィールドワークをやった学生の話。横浜スタジアム近くの公園。うだる暑さの8月上旬。そこのベテラン野宿者の仲間に入れてもらう。集めたものを分けあって飲食し、電気もテレビもないが、しゃべれば退屈しない。通行人の差別のまなざし。ヤンキーっぽい集団に花火を投げ込まれヤケドしそうになる。何日も過ごすたびに「普通」の世界がおかしく見えてくる。といった具合だ。別の学生は「ケータイを持たない生活こそ異文化」とやり始めたが長くは続かなかった。このほか、教科書問題がきっかけで自分とは反対意見の集団（異文化？）と行動をとるに、喧々囂々たる8月15日の靖国神社前で途方に暮れてしまった学生、「恋愛とはなにか」をテーマにフィールドワークを始め、やがて本当に恋愛してしまった学生、在日コリアンをテーマに新宿の職安通りを徘徊したが受け容れてもらえなかった学生、「スローライフ」とか「ダメ連」のライフスタイルに興味を持って「現場」にも行ったが今までの生活から足を洗えない学生、ゲイをテーマに新宿二丁目に通い、自分の中にある差別意識と対峙した学生、「子供という異文化」についてフィールドワークしようとしたが子供に成りきれなかった学生など様々だ。いずれのケースでも人類学のフィールドワークに特有の「参与観察」のようにやっている。つまり同じ物を食べ、同じ作業をやり、語り口までまねて親密な関係をつく

り、「現地」ととけこんで初めて見えてくる世界、自分の価値判断を一時停止し当事者に「成りきる」ことで内側から経験できることを大切にする態度が認められる。

しかしもし「成りきる」ことに成功したら（つまり「ヤッパ大学のほうが重要だ」と思わなくなったら）戻ってきてゼミでその報告をすることもないだろう。逆にそれがたやすく出来るならどこまで「異文化」と言えるか疑念も残る。「異文化」はピミョウだ。しかしプロは厄介な対象でもこの方法でやって面白い本を出している。例えば暴走族、ヤクザ、寿町、山谷、新宗教、官僚・役人、大学教授、ボケ老人、上流階級、刑務所、サーファー、在日コリアン、舞妓、AV女優、競馬などに関する「エスノグラフィー（民族誌）」がそうだ。

このほかにも厄介な問題がある。ある映画作家志望の学生は「演技とはなにか」というテーマを抱いて恐山に向かった。死者が乗り移ると言われるイタコは「本物」なのか「演技」なのか。でものっけからぶち当たった問題はイタコの客のプライバシー問題だった。つまり調査倫理の問題である。それに気づいて或るイタコに説得を重ねてやっと「参与観察」の許可を得た。一方「死」に関心のある学生が施設の老人に「あなたは死についてどう思いますか」と質問したいという。相手の気持ちを察し、それだけはやめたほうがいいとアドバイスした。このほか集団ネット自殺など「参与観察」がほとんど不可能で危険でさえあるテーマもある。

この夏も難問を実行しようとする学生がいる。盲人文化、拒食症、性同一性障害、コスプレ、ホスト、少年犯罪、ひきこもりなどだ。でも出鼻でくじけることも多い。いかに「もうひとつの世界」に入りにくいのか、今の世界に安住してしまっているか、皆思い知ることになる。それに気づくだけでもいいのかもしれない。でも「もう一步踏み出せばよかった」と後悔するかもしれない。一方「成りきる」ことができたものは、夏休みが終わったら「無事」帰ってきてほしい。

（経営学部助教授・異文化間コミュニケーション）

## ルーツを探る ― 自立への序章

橋 本 侃

この休みを「自分は何者か」を探るきっかけにするのはどうだろう？ いつも一緒にいるのに、時々分からなくなるのが「自分」だ。都合のいい時には大人でいたり、都合が悪いと子供でいたりする。自己嫌悪に陥ったと思うと、極楽トンボになったりする。こんな変化に気づき始めたら、自立心に目覚めるのも時間の問題だ。

自分が誰かを探るには、巢立ちが前提となる。しかし、親離れするのは習慣的にむづかしい。第一、親からの経済的支援があってこそその毎日だ。授業料はもちろんのこと、定期代も、朝昼晩のメシ代も自分で稼いで払えるか？ 自宅通学なら、実家に「下宿代」を払えるか？ 答えは自明だ。バイトで稼げるのは精々遊興費だし、授業があるうがなかりうが、夏休みであろうがなかりうが、勉強するのが学生の本分なので、金を稼ぐ時間数も限られている。ならば、親には経済的な独立を卒業まで待ってもらい、甘えの構造を享受しつつ、せめて気持ちだけは自立を目指すことにしよう。

経済的なことは棚上げにしたままなので、後ろめたいし、詭弁めくが、親から心理的に離れれば離れるだけ、親を一人の人間存在として認めることも容易になる。そうなれば、親の生き方をじっくり見られるはずだ。親はこれまでどのような生き方をしてきたのか、これからはどのように生きていくのか……。かくして、自分と親とがそれぞれ独立した個人であることが確認できたら、その瞬間から自分探しも本格的となる。

そうしたら、足を頼りの身上調査を始めよう。自分の生まれた所へ、両親が生活を始めた所へ、両親の両親が住んでいた所へ、という具合に、二、三代をさかのぼった生活の場へ身を置いて、越し方行く末を考えてみよう。今の自分がいるのは両親のおかげで、当の両親はその両親のおかげで、その両親は……という具合に、果てしなき物語を展開させよう。

その前に、この物語に現実味を持たせるために

単純計算をしておこう。今の自分が存在するためには、例えば500年前に、何人の人がこの地球上にいないならなかったのだろうか？ 子供が親になるのにかかる年数を一世代という。30過ぎて出産するのが傾向として多くなったのは最近のことで、昔にさかのぼれば十代で親になっていて不思議でない。そこで、あくまで計算上、一世代を25年としよう。

親は二人だから、その親は二人と二人で、都合4人いる。その前には8人、という具合に倍々に増えていくので、500年前の先祖の数は2の20乗だ。計算すると、1,048,576人となる。君の父親と母親が会って、愛し合い、君が産まれるためには、たった500年前の20世代前に、これだけ多数の人間が存在していたことになる。己の血と肉のなかにこれだけの命が内在しているのだ！

では、果てしなき物語をたどって自分のルーツを探ってみよう。まず、自分が生まれ育った土地に再び立ってみよう。誕生した家がまだ残っていて、両親のどちらかが産まれた家なら、そこを中心に自分と重ねて親の生活圏を広げて歩いてみよう——子供の目と大人になった自分の目の両方を踏査しながら。

両親の一方が違う土地で生まれ育ったのなら、その土地へ行ってみよう。さらに、両親の両親が生まれ育った土地を尋ねよう。両親はこれまでどのように生きてきたのか、祖父母はどのような生涯を送ったのか、曾祖父母の人生はどんなものだったのか……。ただこれだけの調査がきっかけとなって、何かを考え、何かを感じるはずだ——その瞬間が自分探しの原点だ。

この夏休みをきっかけとして、自分が偶然に産まれたのではなく、今あるのは必然である事実を掴んでみよう。そこを出自として自分本来の生き方を模索し始めるのはどうだろう？

(外国語学部教授・英文学)

# 鉄道の旅

## 小 国 力

10年ほど前から毎年のように夏はヨーロッパに出かけている。活力の充電をかねた技術文化史の調査のために、2年に1度ぐらいいは鉄道の旅をする。実際に訪れて、本やテレビで得た知識を深めたり正すためである。鉄道の旅には、2とおりの楽しみ方がある。1つは、ある街を拠点として急行を利用し、放射状に近隣の街を日帰りを訪れる。ミラノ、パリ、ロンドン、ブリュッセル、フランクフルト、ミュンヘンといった街はそれにふさわしい。もう1つは、流れ旅で、いくつかの国や街を転々としてまわる。どちらかという、旅行会社のバス旅行に似ている。もっとも1人旅であるから、訪れる先はその日の気分次第で変わる。もちろん、この2つの旅を組み合わせるともっとすばらしい鉄道の旅を楽しめる。

イタリアのミラノを拠点としたときは、トリノ、ジェノヴァ、ピサ、ボローニャ、フィレンツェ、ヴィチエンツァ、パドヴァ、ヴェネチア、それにレオナルド・ダ・ヴィンチの生地エンポリを訪れた。ドイツのフランクフルトを拠点としたときは、カールスルーエ、ヴュルツブルク、ローデンプルク、ハイデルベルク、リュードスハイムを訪れたし、ガウスで名高いゲッティンゲンを拠点としたときは、カッセル、ハノーヴァ、ツェレ、ハンメルン、ハンブルクを訪れた。ミュンヘンを拠点としたときは、オーストリアのザルツブルクとインスブルック、それにエルム、アウグスブルク、レーゲンスブルク、ニュールンベルク、エルランゲンを訪れた。忙しいことは忙しい。

流れ旅の代表的な例としては、ストックホルムを起点としてウプサラ、デンマークのコペンハーゲンとオーデンセ、海をフェリーで渡ってドイツのハンブルク、ハノーヴァ、ベルリン、ライプチヒ、アウグスブルクをへてミュンヘンにたどりつ

いた。さらにベルリンでは、ポツダムやシャルロテンブルクを訪ね、ライプチヒではゲートで名高いヴァイマルや、ドレスデン、それに陶器の街マイセンを訪れた。

混合タイプの旅としては、パリからブリュッセルに出て、さらにドーヴァー海峡をくぐってロンドンに出て、それぞれを拠点として放射状に旅した。パリでは、ヴェルサイユ、レオナルド・ダ・ヴィンチに関係のあるシャンボールと彼の没地アンボワーズなどを訪れた。ブリュッセルからは、アントワープ、ゲント、ブリージュ、ドイツのアーヘンとケルン、オランダのデルフトとアムステルダムを見て回った。さらに、ロンドンではオックスフォード、ケンブリッジ、カンタベリを訪れた。

これらの旅は、科学・技術者のなかでも、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ガリレオ、ケプラー、ライプニッツに関係した街が中心となる。彼らにゆかりの場所を、駅前の観光案内所で親切な係員から聞き出して訪れる楽しみは、ガイド旅行では味わえない。もっとも、コペンハーゲンで、主目的とした天文学者チコ・ブラーエゆかりのヘヴン島に渡ろうとしたら、土曜日で予約が満杯で乗船できず、すごすご街を後にしたにがい思いも残る。自分の知識と関連つけて自分の観点から街や遺跡を訪ねるのは楽しいものである。たとえば、ケプラーゆかりの街のなかで訪れたのは、生地ヴァイ・エル・シュタットを振り出しに、それぞれが古い歴史をもつチュービンゲン、グラーツ、プラハ、リンツ、エルム、アウグスブルク、それに没地レーゲンスブルクの8箇所である。10年近い歳月をかけて回り、ますます彼の人柄が気に入った。いつの日にか彼が住んだ時代を背景として彼の小さな伝記でも書けたらと思う。

(理学部教授・応用ソフトウェア設計論)

## 『現代日本経済論[新版]—戦後復興,「経済大国」,90年代大不況—』

井村喜代子著 有斐閣 332.107-214

大林 弘 道

イラク戦争とその「戦後」にかけての米国の行動に対する世界中に広がる批判について、入江昭氏(バーバード大学教授)は「現在最も深刻なのは、アメリカ人が海外に出かけて行って帝国主義的な振る舞いをする、ということよりは、逆に彼らが内向きになり、世界への関心度を低めているという傾向である」(「朝日新聞(夕刊)」2003年6月2日)と指摘した。しかし、同時に「外国に対する無知や無関心は、米国だけの問題ではない。米国批判に終始して、結果的に国際社会との距離をますます広げていったり、米国にならって一国中心主義的になったりする代わりに、世界中の国際主義者は団結して、無知と偏見に抵抗していくべく、努力を重ねるべきであろう」(同上)と訴えている。

翻って、日本では、イラク戦争における米軍の「帝国主義的振る舞い」は報道されず、「米国批判」は打ち消され、「米国にならって一国中心主義的になったりする代わりに」「有事三法」が制定され、さらに「イラク復興支援法案」の成立がめざされている。日本のそうした軍事的・政治的方向は経済的方向としての「構造改革」と軌を一にして推進されている。そのことは私たちに間近な将来への軍事的・政治的・経済的不安を呼び起こしている。

このような状況にあって、私たちが入江教授の提唱する努力を実践するとすれば、まず、日本の上記の方向の背景・基盤を具体的に理解することではないかと私は考える。井村喜代子氏(慶應義塾大学名誉教授)の『現代日本経済論[新版] 戦後復興,「経済大国」,90年代大不況』はその意味においてもっとも相応しい著書である。総頁にして506頁の大著は決して簡単には読みきれない。しかし、現在、大学に学ぶ私たちは気軽に書かれて気軽に読まれることを期待する本などは読むべきではない。著者が全身全霊を込めて書いた著書

こそ読むに値する。本書は著者が40年以上にわたって研鑽を積んだ成果である。

著者は本書の課題を「敗戦・占領以降の急激な変化と発展の所以を問い、その過程で日本が何を求め、何を獲得してきたのか、また何を失い破壊し、何を犠牲にしてきたのか……を問うことである」(2頁)とし、その過程が「第2次世界大戦後の世界の新しい特徴と枠組みのもとで、特にアメリカの対日政策とアメリカとの密接な関連によって、初めて実現したものである」(3頁)と考え、本書の基礎視角を、「現代日本経済の特徴と問題性を、その急激な変化・発展において捉え、アメリカとの関連を軸として考察すること」(3頁)に据えたのである。本書は1993年に初版が刊行され、10刷を重ね、2000年に新版が刊行され、同種の著書としては異例の多数の読者を得ている。中身に立ち入って紹介できないのは残念であるが、読者にとって本文はもとより表番号総数83、注総数730の一つひとつもがゆるがせにできないはずだ。また、読者の中には本書が具体的な経済政策を提示していないことにあるいは不満を持つかもしれない。それについて、著者は今日の経済政策の困難を強調しつつ、「経済政策の基本に据えるべきは、企業にとっての効率・利益ではなく、経済活動は本来人間生活を真に豊かにするためのものであるという原則」(483頁)であり、「いかに困難であろうとも、経済発展・技術の真のあり方を追求し、愚かしい歪んだ方向に進みつつある経済動向に歯止めをかけることが、現代に生きる人間に課せられた責務であろう」(485頁)と主張するのである。著者がイラク戦争反対の「意見広告」(「朝日新聞」全国版2月27日・名古屋版2月28日、「毎日新聞」関東地域版3月4日)の実現に事務局を担当し奮闘したのもそうした「歯止め」の政策実践の一環なのである。(経済学部教授・中小企業論)

## 『風の万里 黎明の空 (下)』十二国記

小野不由美著 講談社文庫 B913.6-4.B-2675

松澤和光

不思議な経緯から異界の王となった女子高校生・陽子は、自らの統治者としての未熟さに悩みながらも、辛い戦いの末に自国の運命を切り拓き、人々を新しい世界へと導いていく。十数冊にわたり未だ書き続けられている壮大なファンタジー巨編から、私お気に入りの7巻目を挙げさせて頂いた。いや～、でも隣国のおトボケな王・小松尚隆が活躍する5巻目も捨てがたいんだよな。え？中高生向けシリーズにナニを夢中になってんだって？いやいやミーハーな表紙絵に騙されてはいけない。青年期における自我の確立から、社会や国家、世界の在り方まで、実に幅広いテーマに対する鮮烈なメッセージが、第一級のエンターテインメントに見事にまとめあげられている。何よりベタベタした恋愛系のストーリーが全く出てこないのも潔い。今風に言う「オトコ前な」陽子、かっこええなあ、惚れちゃうなあ。

昨年NHK - BSでアニメ化されたのを、たまたま見かけたのがキッカケだった。驚いたのなんの、セリフが全く聞き取れないのである。日本語で話されていることだけは、なぜか明瞭なのに。「キリンワココウフキョウノイキモノト・・・」もちろんこの小説世界での特殊用語が多いのは確かだが、それ以上に漢語的な堅い表現がやたら多用されている。まあ普通は「頑迷な！」等と言う単語が話し言葉に出るとは考えにくいのだが、古代中国神話がベースと思われるその「異世界」に一度没頭してしまうと、もはや全く気にはならない。そして、あーら不思議、もうアニメのセリフがちゃんと漢字化されて聞こえてくる。この辺りの現象は、私が専門とする「ことば工学」的に大いに研究心をそそられるところであるが、本欄の意図からは外れるのでホドホドにしておこう。興味をもたれた方には、高島俊男「漢字と日本人」

(文春新書)や、鈴木孝夫「日本語と外国語」(岩波新書)の一読をお勧めする。「文字表記という視覚情報も併用しながら伝達を行うテレビ型言語」(鈴木)としての日本語の素晴らしい特性に、改めて驚嘆すること請け合いである。

おっと十二国記に話を戻そう。まずは近所の図書館で借りてすっかりハマってしまい、結局は全巻買い求めて既に各巻3～4回は読み返した。毎回、清々しい感動で涙ポロポロである(オレも歳をくったかなあ)。居間の片隅に並べて中学生の息子も愛読しているが、小学生のおチビさんにはササガに荷が重いのか。何せ漢字の量がハンパじゃない。よくこんな活字があったもんだ、ってな難しいのが目白押しだ。ところが、これがまた「ルビ」という日本語特有の画期的インタフェースのおかげで、苦も無く読みこなせるばかりか、特殊用語の意味までスンナリと頭に入る。おおこれも面白い研究テーマだな、等とイカンイカン、また工学者の悪い癖が出た。

とにかく、そんな余計な話は別にして、冒険ファンタジーとしても自分探し青春小説としても純粋に楽しめる。騙されたと思って一度読んで欲しい。シリーズとしては第1巻からが定石だが、ジツは最初の「月の影 影の海」はストーリー的に暗すぎるかも知れない。幸いにこの4月からNHK教育で再放送が始まっているので、まずアニメを楽しんでから、も手かなあ。セリフが聞き取れるか、実験するのも面白い。やがてドブリと十二国記の世界に引き込まれている自分を発見することだろう。

ああそれにしても、陽子は十二国成立の謎を解くんだろーか？小野先生！早く続き書いてよお。

(工学部教授・コミュニケーション工学)

『フリードリッヒ・リストと彼の時代—  
国民経済学の成立』

諸田 實著 有斐閣 B 331.5-78 331.5-9

ドイツ人の生活世界の営みとその変遷について、その意味を比較史的に問い、数々の論文・著作を生み出してきた著者。その著者のこれまでの研究成果が一点に流れ込んで行ったかのような作品『フリードリッヒ・リストと彼の時代』が出版された。

産業革命後のイギリスの輸出攻勢、市民革命後のフランス市民意識の興隆との影響に翻弄される領邦(株儒)国家ドイツの政治・経済・社会・文化の風景から「時代の声」を正確に読み取っているリストが、歴史の狭間で苦悩しながらも時代と誠実に対峙する人々に対して「無給の弁護人」となって、ドイツ統合を目指し、社会改善・改革に獅子奮迅の働きをする。そのリストの行動がまるで分刻みであるかのように描かれ、余韻の連鎖の中で、歴史の精神の豊さと厳格さを感じさせる素晴らしい本であった。

リストは、16歳で地方の行政職に就く。この職は、因習が支配し、恣意的管理下にあり、兄と母がその理不尽により命を奪われていた。その因習の一扫は、大学で専門教育を受けた者に代わる以外にないと変革に乗出す。それが折からの憲法制定に基づく市制改革へと広がる。その活動は、38の領邦の関税・通行税がドイツ内の交通を萎縮させ、そこに外国から廉価な製品が流入し、困窮する未成熟な商工業の姿をも捉えていた。その現象から、当時流布した世界主義経済学に疑問を持ち、その国独自の「国民経済学」の必要性を確信する。そこで商工業の保護を目的に全国規模の「ドイツ商人・工場主協会」設立と領邦を超えた関税統一に向けた運動に加わり、雑誌の編集も行い、その意味理解の普及を図った。しかし、この活動が「世」の転覆を企てる「デマゴグ」として弾圧を受け、市民権を剝奪されてしまう。リストは、ラファイエットとの親

交もあってアメリカに渡った。

その国でリストは、自由の中に力強く自生する産業を見た。「物質的・精神的」資本、特に後者の育成が国民的生産力増強に必要なだとして、それを裏付ける『アメリカ経済学概要』を通信の形で著し、それが50以上の地方紙に転載され、大きな反響を巻き起こした。

領事となってドイツに戻ったリストは、アメリカでの実践から鉄道建設事業が、領邦を超えて流通網を整備し、血の通った経済循環を作り上げるのに必要だと考えた。故に国内商業の自生的発展が見込まれる数々の鉄道路線敷設の提言をした。自分よりもまずドイツを優先したリストの努力とは裏腹に、真

意を理解しない、提言の路線間の競争を恐れる地域エゴによって「油断のならない者」と扱われ排除されてしまう。失意の内にフランスに渡るが、同朋への愛は絶ち難く、仕官の誘いも断り、研究に打ち込み、ドイツ国民のための経済形成の理論、『経済学の国民的体系』を書き上げ、ドイツで出版したのであった。

リストは、ジャーナリズムの発展にも努力した。数々の新聞や雑誌それに各種事典の編集・執筆

手がけ、商工業者をはじめ子供や学校経験の無い人々が自らの育成に役立たせることを願う活動であった。

マルクスの『資本論』と並び称される上記リストの主著は、彼の最初に就いた「職」の抱える社会矛盾の改革から始まる一連の社会的運動を通じて生み出されたということ、更に大切なことは、その運動が、「生地野山」、「純朴で誠実な隣人」を深く愛するが故の「無償の行為」からであったということの理解である。そして、我々の日常生活が、余りにも近視眼的で、利己主義的に成ってはいまいか、その為に「隣人の存在」や「社会性」「公共性」への配慮を失ってはいまいか、という著者の問いかけを行間から読み取れるに違いない。

(T・H)

## 図書館展示コーナー

### 『LIFEに見るアメリカ 黄金期の広告』

展示期間 7月1日～10月31日

1950年代＝世界のなかでアメリカがもっとも豊かだった時代。今回は、この時代を垣間見ることができる、ポップで楽しい広告を、雑誌"LIFE"から選んで展示してみました。当時の"LIFE"のページを繰ってみると、その時すでにアメリカにはマイカーや洗濯機・冷蔵庫などの高級電化製品、また、きわめて豊富な日用品が溢れていたことが分かります。当時発売されていて、現在でも販売され続けている製品の広告や、自動製氷機が付いている

冷蔵庫など技術的に優れた電化製品の商品広告にはビックリさせられます。

そして50年後の今、私たちもその豊かさを手に入れることができました。1950年代のアメリカを振り返ると、今の私たちの生活の実態が見えてくるかもしれません。



## 図書館の利用案内

1. 図書館入口に電子掲示板を設置  
開館時間、イベント情報など最新のお知らせを流しますをご覧ください。
2. 在学生向け一日図書館体験コースを10月から実施  
図書館業務を通じて、情報の収集や加工、労働の尊さなどを学ぶ機会を提供します。詳しくは図書館ホームページまたは掲示をご覧ください。
3. 携帯電話OPAC検索サービス(試験運用)を開始  
携帯電話版図書館ホームページにアクセスすれば、自宅や外出先から、いつでも図書館の蔵書検索ができます。  
<http://osirabe.net/opac.kanagawa-u/>  
(注)携帯電話の通信料(パケット通信料等)は、利用者の負担になります。
4. 学期末試験に伴う一般公開の一時休止について  
7月14日(月)～7月30日(水)
5. 夏季長期貸出について  
貸出期間：7月16日(水)～9月10日(水)  
返却期限：9月25日(木)
6. 夏休み期間中の開館時間・休館について

### 横浜図書館

開館時間：9時30分～18時

休館日：日曜・祝日・一斉休業期間

[8月7日(木)～8月17日(日)]

### 平塚図書館

開館時間：9時10分～16時50分

休館日：土曜・日曜・祝日・一斉休業期間

[8月7日(木)～8月17日(日)]

## 夢 現実 ゆめとうつつ

われわれはコンピューターとネットワークを使えば、自分の意思を世界中の人々に伝えることができる。

また知ることも可能となった。原子力という永遠の火も手に入れた。バイオテクノロジーは生命さえも作り出そうとしている。しかし、このような文明の成果を前にして、不安は増すばかりだ。科学技術の進歩の速度に対して、それを制御する社会の仕組みが追いつけないのも事実だが、もっと決定的なことがある。それは人間が享受できる科学技術には限界があるのではないかということだ。薄暗い街、手作業、栄養不足や病気による夭逝の時代、人は愛や悲しみ、怒りといった感情で日常を紡いだ。疲労による熟睡があった。今年の夏は暗闇に星を見よう。青い海とツマベニチョウの舞う島を想いながら。(空蟬)